

がん

小川未明

青空文庫

若いگانたちが、狭い池の中で、魚をあさっては争っているのを見て、年とつたگانが歎息をしました。

「なぜ、こんなところに、いつまでもいるのだろうか。」

これを聞いた、りこうそうな一羽の若いگانが答えて、

「おじいさん、どこへゆけば、私たちは幸福に暮らされるとい

うのですか。この池へおちつくまで、私たちはどんなに方々の

沼や、潟を探索したかしれません。けれど、どこにもすばしこ

い猟犬の鳴き声をきくし、狡猾な人間の銃をかついだ姿

を見受けるし、安心して、みんなの休むところがなかつたので

す。そして、ようやく、この禁猟区の中のこの池を見いだした

というようなわけです。」と、老いたるがんに向かつて、いいました。

「そのことは、私にもよくわかつている。だから、人間がめつたにゆかないところを探すのだ。もつと遠い、寒い国へ向かつて旅立ちをするのだ。私がまだ子供の時分、親たちにつれられて通つたことのある地方は、山があり、森があり、湖があり、そして、海の荒波が、白く岸に寄せているばかりで、さびしい景色ではあつたが、人間や猫、犬の影などを見なかつたのだ。あの記憶に残っていると、もう一度探しに出かけるのだ。」

「おじいさん、なんだか夢のような話ではあるが、そこをはつきりと覚えていきますか。」と、若いがんがたずねました。

「小さい時分のことを、どうして、よく覚えていよう。かすかな記憶にしか残っていない。しかし、そこを探し出すのだ。」と、年とつたがんはいいました。

りこうな若いがんは、みんなを呼び集めて、その夜、月の下で協議を開くことにしました。するといろいろの説が出ました。

「人間のみずから設けた禁猟区において、こちらの身の安全をはかるということは、なんと賢明なやり方ではないか。もしここを飛び出したが最後、自分たちは、いつどこで、どんな危険にさらされないともかぎらないだろう。」と、Bがんが、いいました。

「その心配は道理である。が、おじいさんは、ほんとうにそう

した理想の世界を知っているのだろうか。」と、冒険好きなの、

K^{ケイ}がながいいました。

「小さな時分に、旅をする途中で見たといいのだ。そしていま、

その記憶はかすかになつたけれど、おじいさんは、探せばかなら

ず見いだせるという強い信念を有しているのだ。」と、この禁

猟区に、はじめてみんなを導いた、りこうながながいいました。

「そんなら、俺たちは、おじいさんに案内を頼んで、出かける

ことにしようじゃないか。」と、中でも、もつとも野生を有して

いた、K^{ケイ}がなが、さつそくこの説に賛成しました。

「幾百里か、飛んでいって、それが無いといつて帰ってくるこ

ができるだろうか？」と、B^{ビー}がなが、むしろ、反対の意見をも

らしました。

「そのことだ。ただ、この頼りない希望のために、この安全なすみかを捨ててゆくということが考えものなのだ。おそらく、もう二度ともどつてくることはできなからう。」と、りこうそうながんが、考え深い顔つきをしてBのいったことに答えました。

「人間の与えた安全が、なんでいつまで頼りにならう。いまから、私たちは、それを探しに出ても遅くはないのだ。」と、Kがながいいました。

しかし、こうした話が持ち上がると、自由を慕う本能が、みんなの心の中に目覚めたのでした。

「ゆこう、ゆこう、ここで、こうして意気地なく、この冬を送る

よりか、翼つばさの力ちからのつづくかぎり、広い、自由じゆうな、そして、安全あんぜんな世界せかいを探さがしに出でかけようじゃないか。」と、ついにみんなの意い見けんが、一致いちしました。

「おじいさん、どうぞ道案内みちあんないを頼たのみます。」と、彼かれらはいいました。

このときまで黙だまって、月つきを見上みあげていた、年としとつたがんは、「ここから、北きたへ、北きたへと飛とんでゆけば、その地方ちほうへ出でられるような気がきする。ゆくなら今夜こんやにでも、すぐに立たとうではないか。」
「いいました。どのがんも、これに對たいして不平ふへいをいったり、反はん對たいするものはありませんでした。みんなは、月つきの光ひかりを浴あびながら、めいめいつばさをひろげて、羽はねならしをしていました。そし

て、拍子ひょうしを合あわせて、二度、三度ど羽はばたきをしました。これから、長旅ながたびに出でかける前まえのあいさつであります。

つぎの瞬しゅんかん間に、彼かれらは、空そらへ舞まい上あがりました。そして、池いけの上うえを、なつかしそうに一周しゅうしたかと思おもうと、ここを見捨みすてて、陣形じんけいを造つくつて、たがいに鳴なき交かわしながら、かなたへと消きえていつてしまったのであります。

年としとつたがなが、彼かれらの先達せんだつでありました。つぎにりこうなエス、Sがんと、勇敢ゆうかんなKがながつづきました。そして、しんがりけーを注意ちゅうい深いBがながつとめ、弱よわいものをば列れつの真まん中なかにいれて、長途ちようとの旅たびについたのであります。

冬ふゆへかけての旅たびは、烈はげしい北風きたかぜに抗こうして進すすまなければならな

かつた。年とつたがんは、みんなを引き連れていこう責任
 を感じていました。同時に若いものの勇気を鼓舞しなければなら
 ぬ役目をもっていました。彼は、風と戦い、山野を見下ろして飛
 んだけれど、ややもすると翼が鈍つて、若いものに追い越されそ
 うになるのです。

「おじいさん、ゆっくり飛びましよう。」

若いがんたちは、いくばくもなくして、この年とつたがんを冒
 険の旅路の案内にさせたことは、無理であり、また、気の毒
 であつたことを感じました。けれど、どうすることもできません。
 そして、こういたわると、年とつたがんは、若いものにみずから
 の力の衰えと、弱気を見せまいと努力に努力をつづけて飛ん

でいました。

しかし、彼らは、ある山中の湖の上を通つたときに、ついにそこへ降りなければなりませんでした。

先達の老いたがんは、もうまったく飛ぶことができなかつたからです。

「私たちは、ここへ飛んできたことが、無謀であつた。」と、S
Eス
がながいいました。

「いや、けつしてそうでない。この湖水を見いだしただけでもこの旅はむだではなかつた。あのすばらしい四辺の山々を見るがいい。」と、元気な、Kがなが、いいました。

「それにちがいない。いま、忘れていた記憶がすっかり甦えつて

きた。これから、もつと、もつと、北へさしてゆくと私のいった理想の土地へ出られるのだ。しかし、私の力は、もうそこまですくことができな。どうか私をここに残してみんなは、早く旅を急いだがいい。」と、年とつた、哀れながんがいました。

「おじいさん、そんな気の弱いことをいってはいけない。私たちは、おじいさんを捨てて、どうしてゆくことができよう。二日でも、三日でも、おじいさんの体がおるまで待つことにします。」と、Bがんがいうと、Kがんも、Sがんも、みんながその言葉に賛成しました。

しかし、年とつたがんにとって、この山中の湖は彼のしかばねを葬るところとなりました。まだ、湖の上が鉛色に明けき

らぬ、寒い朝、彼は、ついに首垂れたまま自然との闘争の一生を終おわることになりました。

その日は、終しゅうじつ日ひがんだちは、湖上こじょうに悲かなしみ泣なき叫さけんでいました。そして、夜よるになると彼らかれの一群ぐんは、しばらく名残なごりを惜おしむように、低ひくみずうみうえく湖の上を飛とんでいたが、やがて、Kケーが先頭せんとうに北きたをさして、目的もくてきの地ちに到達とうたつすべく出しゅつ発ぱつしたのであります。それは、星影ほしかげのきらきらと光ひかる、寒い晩ばんのことでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

初出：「民政」

1934（昭和9）年11月

※初出時の表題は「雁」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年7月16日作成

2012年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

がん

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>